様　式　C－19、F－19、Z－19　(共通)

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １９ 日現在

機関番号：３４５０９

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2013～2015

課題番号：２５３８０９９２

研究課題名（和文）記憶場面状況に応じたメタ記憶の機能に関する実験的検討

研究課題名（英文）An experimental investigation of metamemory function in response to a variety of memory situations

研究代表者

清水　寛之（Shimizu, Hiroyuki）

神戸学院大学・人文学部・教授

研究者番号：３０２０２１１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、個人がさまざまな場面状況のもとで自らの記憶能力や記憶特性、知識状態をどのように認識し、そうした認識に基づいて記憶活動をいかに展開していくのかを実証的に明らかにすることである。一般大学生92名の実験参加者に対して個人ごとに、(1)実験室場面での記憶活動、(2)検査室場面での記憶遂行、(3)日常生活場面での記憶行動、の3点について実験参加者自身による自己評価と客観的な課題成績基準または一般的記憶行動傾向に関する基礎的データを収集した。このデータをもとに、記憶のモニタリングとコントロールの関係に関連づけて、広範な場面や文脈における個人のメタ記憶機能に関する理論的検討を行った。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study was to empirically investigate how people monitor their own memory ability, memory characteristics and knowledge states. In addition, the study sought to understand how people make use of the outcomes of such memory monitoring in order to actively and effectively control memory activities in a variety of situations or contexts of memory. Each of ninety-two university students individually provided the data of objective and subjective evaluations regarding to (a) memory activity in laboratory settings, (b) test performance in assessments of memory ability, and (c) memory behavior and actions in everyday life by means of written questionnaires. Based on these data, metamemory function in response to a variety of memory situations was theoretically and comprehensively discussed in relation to memory monitoring and control processes.

研究分野：認知心理学

キーワード：記憶　メタ記憶　記憶モニタリング　記憶コントロール　記憶実験　日常記憶　記憶検査

１．研究開始当初の背景

人はさまざまな場面で多くの事柄を記銘し、一定時間を経てもそれらを保持し、必要に応じてそれらを想起する。しかしながら、自らの期待や予想のとおりに記銘や想起という記憶活動が実行され有効に機能することもあれば、自己の記憶活動による結果が事前の期待や予想とはかけはなれたものになることがある。

認知心理学的記憶研究では、個人が自らの記憶能力や記憶特性、知識状態を認識し、そうした認識に基づいて能動的に記憶活動を展開していく心理過程をメタ記憶（metamemory）と呼んでいる。メタ記憶は、(a)刺激対象への直接的な働きかけや情報抽出に関連した対象レベルと、(b)対象レベルでの処理活動を支配する上位のメタレベル、の二つのレベルから構成されている。そして、将来の想起の必要性を自覚し、自己の記憶活動や記憶状態を監視・点検すること（記憶モニタリング：「対象レベル→メタレベル」の情報の流れ）、課題場面や刺激材料の性質に応じて適切に記憶活動を制御・調整すること（記憶コントロール：「メタレベル→対象レベル」の情報の流れ）が含まれる。メタ記憶に関する理論的枠組みは有用で、その後数多くの実証的研究を触発した。ここ 20 年ほどの間に精力的に多くの重要な研究知見が示され、解説書や翻訳もいくつも出版されている。

２．研究の目的

記憶場面状況によってメタ記憶の機能性が異なる可能性があり、総合的・包括的な議論が必要であると考えられる。たとえば、記憶実験で優秀な課題成績を示す人たちや記憶検査で高い記憶能力を示す人たちが必ずしも日常生活場面において記憶に関する失敗とは無縁であるというわけではない。その一方で、日常的にさほど物忘れが少なく、将来の予定や約束を忘れずにきちんと実行できる人たちがつねに実験室や検査室で行われる課題遂行にすぐれているとは限らない。

本研究は、メタ記憶の観点に基づく記憶モニタリングの正確性と記憶コントロールの効果性が、(a)記憶実験場面、(b)記憶検査場面、(c)日常記憶場面、においてどのように認められるのかに焦点をあてる。一般成人（大学生）のみを対象とし、基準的なデータの収集を試みる。研究方法としては、記憶とメタ記憶に関する実験、各自の記憶能力を調べる記憶検査、日常記憶に関する質問紙調査の３点を同一の個人に対して実施する。

実験室場面では、心理学実験室において実験参加者に対して個別的に実験的記憶課題を与え、課題成績を測定する。その際、呈示される刺激材料には、あらかじめ基準化された日本語の有意味言語材料（単語）を用いる。したがって、日本語単語の記銘学習を実験参加者の一人ひとりに課し、それぞれの記憶活動を記録しながら、記憶保持の正確度を調べる。具体的には、認知心理学における伝統的な記憶実験課題である自由再生課題が用いられる。その際、実際の再生成績と実験参加者による再生予測との一致・不一致の程度が実験室場面での記憶モニタリングの正確度として測定される。

主な実験手続きとしては、実験参加者に対して一定の速度で刺激項目を継時的に視覚呈示し、呈示終了の直後に呈示順序に関係なく再生することが求められる。そして、直後再生のあとに、後続の再生テストでの再生成績の予測も求める。そのような実験試行が別の記銘項目リストに対して複数回行われたあとに、呈示されたすべての記銘項目に対する最終自由再生が求められる。この実験課題を通して、直後再生成績、最終再生成績、最終再生成績予測、という３つの指標が得られるが、このうち最終再生成績と最終再生成績予測との差をもって実験室場面での記憶モニタリングの正確度の指標とする。

そのあと、実験参加者がどのように自由再生課題に取り組んだのかを調べるために、下位リハーサル方略質問紙（rehearsal substrategies questionnaire）が与えられる。この質問紙には、10 の下位リハーサル方略（単一反復、多重反復など）が記載されており、実験参加者が自由再生課題において呈示された刺激項目を実際にどのように記銘しようとしたかについて、それぞれの下位リハーサル方略の主観的な使用頻度に関する評定が求められる。これらの下位リハーサル方略に関する主観的頻度評定をもって実験室場面での記憶コントロールの効果性が検討される。

検査場面での個人の記憶能力と記憶モニタリングの正確度を調べるために、日本版の改訂版ウエクスラー記憶検査（Wechsler Memory Scale-Revised; WMS-R）とリバーミード行動記憶検査（Rivermead Behavioral Memory Test; RBMT）が用いられる。いずれも個別式の記憶検査であり、臨床現場などで広く利用されている標準化された検査である。WMS-R は、13 の下位検査（「1. 情報と見当識」、「2. 精神統制」など）の得点に基づいて五つの指標（一般的記憶、言語性記憶、視覚性記憶、注意／集中力、遅延再生）が算出される。そのうち、遅延再生については、実験室場面での最終再生予測と同様に、この下位検査成績の予測が求められる。RBMT には九つの下位課題（「1. 姓名の記憶」、「2. 持ち物の記憶」など）が含まれる。このうち、「9. 見当識」を除く八つの下位課題が用いられ、これらの下位検査成績の予測が求められる。

日常生活場面での自己の記憶行動を捉えるために、3 種類のメタ記憶質問紙が用いられる。メタ記憶質問紙は、個人の記憶信念及び自らの記憶行動に関する主観的評価や回想的判断を調べるものである。その３種類と

は、(a)日常記憶質問紙（Everyday Memory Questionnaire, EMQ）、(b)認知的失敗質問紙（Cognitive Failures Questionnaire, CFQ）、(c)成人メタ記憶尺度（Metamemory in Adulthood Questionnaire, MIA）である。

３．研究の方法

(1)実験参加者　近畿地方の１私立大学に在籍する学生 92 名が本実験に参加した（男性35名、女性57名；平均年齢21.2歳、標準偏差1.48、範囲19－28歳）。

(2)実験装置　実験室場面での刺激項目の呈示には、Dell製PC、Optiplex780が用いられた。刺激項目の呈示に関する制御にはCedrus製ソフトウエア SuperLab4.0 が用いられた。実験参加者への刺激呈示については、実験者の操作する PC のディスプレイとは別に、専用の NEC 製 24 インチ液晶カラーディスプレイ LCD-EA241WM）が用いられた。

(3)刺激材料　実験に用いられた刺激材料は、カテゴリー別出現頻度に関する基準表から、高頻度の単語を50個抽出し、各リスト10項目からなる記銘項目リストを５リスト作成した。記銘項目はリスト内でできるだけ意味的にも音韻的にも無関連になるように配列された。

(4)質問紙　実験室場面において実験参加者がどのように自由再生課題に取り組んだのかを調べるために、下位リハーサル方略質問紙が用いられた。この質問紙には、次の 10の下位リハーサル方略が記載されていた。①単一反復（単語を一つずつ単純に何度も繰り返す）、②多重反復（単語を数個ずつまとめて何度も繰り返す）、③イメージ化（各単語のイメージを思い浮かべる）、④リスト内連想（リスト内で単語同士を結びつける）、⑤リスト外連想（あるリストの単語を別のリストの単語と結びつける）、⑥単一項目による文章化（各単語について文章を作る）、⑦複数項目による文章化（単語をいくつかまとめて文章を作る）、⑧物語化（リストの単語を全部使って物語を作る）、⑨カテゴリー化（同一カテゴリーに属する単語をまとめる）、⑩類似による群化（同一の文字や音韻を含む単語をまとめる）。これらの下位リハーサル方略のそれぞれについて、「まったくしなかった」から「つねにしていた」までの５段階で評定することが求められた。

日常生活場面における記憶行動や記憶信念を調べるためのメタ記憶質問紙として、EMQ、CFQ、MIA、の 3 種類の質問紙が用いられた。EMQ については、日常生活場面での特定の記憶行動や記憶現象を表す記述文（全28項目）に対して，その出現頻度を「最近６ヶ月で１回もない」から「日に１回以上」までの 9 段階で評定することが求められた。CFQ については、日常生活場面での認知的失敗に関連した出来事を表す記述文の一部（全 25項目）に対して、その出現頻度を過去６ヶ月の間で「まったくない」から「非常によくある」までの５段階で評定することが求められた。MIA については、自己あるいは一般人（一般的な他者）における特定の記憶行動や記憶信念を表す記述文（全44項目）に対して「まったくそのとおりだと思う」から「まったくそうは思わない」までの 5 段階、あるいは、「まったくしない」から「いつもする」までの５段階で、それぞれ適合度あるいは出現頻度を評定することが求められた。

(5)記憶検査　個人の記憶能力を調べるために、WMS-R と RBMT が用いられた。前述のように、WMS-R は13の下位検査から構成されているが、このうち「1. 情報と見当識」については、実験参加者が健常大学生であり、あとの指標得点の算出には用いられないことから、質問の一部（「ここはどこですか？」など）の実施が割愛された。同じく、RBMT は、九つの下位検査から構成されているが、このうち「9. 見当識と日付」（検査用紙のなかの問題番号の不有れた検査課題では、「10. 日付以外の見当識」と「11. 見当識」）については、上記と同じ理由で実施が割愛された。

(6)実験手続き　実験は実験参加者ごとに個別的に行われた。実験参加者は、コンピュータ画面に継時的に視覚呈示される 10 個の単語を確実に記銘することが求められた。次に、単語の呈示終了後に、できるだけ正確に、できるだけ多くの単語を再生するように求められた。そのような試行が全部で５回行われることが示され、全５試行終了後に別の簡単な作業を行ったあとに、呈示されたすべての単語の再生が求められることが教示された。さらに、それぞれの再生試行の終了後に、呈示された 10 個の単語のうち、あるいは自分が書き出した単語のうち、何個くらいを最後にもう一度思い出せると思うか、その個数を予測するように求められた。

記銘項目リストは、１項目につき４秒の割合で呈示された。各項目リストの呈示終了後、1 分間の直後自由再生テストが行われた。そのあとに、最終再生テストに関する再生成績の予測が行われた。「記銘項目リストの呈示→直後再生テスト→最終再生成績の予測」という手続きは５試行行われ、試行間間隔は約1 分であった。最後の試行において、呈示されたリスト項目に対する最終再生成績の予測がなされたあとに、妨害作業である３桁数字の逆算課題が 30 秒間行われた。その後、呈示された全リスト項目についての最終再生テストが３分間にわたって行われた。自由再生課題の終了後に、実験参加者に対して下位リハーサル方略に関する質問紙が与えられ、自己ペースで回答することが求められた。

(7)調査手続き　質問紙調査は実験に引き続

いて、実験参加者ごとに個別的に行われた。EMQ、CFQ、MIA の3種類の質問紙が与えられ、自己ペースで回答することが求められた。

(8)検査手続き　質問紙調査の終了後、個別的に WMS-R と RBMT が実施された。WMS-R の13の下位検査のうち「4.論理的記憶Ⅰ」、「5.視覚性対連合Ⅰ」、「6.言語性対連合Ⅰ」、「7.視覚性再生Ⅰ」については、後続のそれぞれの遅延課題において完全正答を100パーセントとした場合に、およそ何パーセントくらいの成績をあげることができるのかの予測が求められた。RBMT は、九つの下位検査のうち、「1. 姓名の記憶」、「2. 持ち物の記憶」、「3. 約束の記憶」、「4. 絵の記憶」、「5. 物語の記憶」、「6. 顔写真の記憶」、「7. 道順の記憶」と「8. 用件の記憶」、の八つの下位検査については、課題教示がなされ、遅延課題が行われることが予告された際に（上記5、7、8の下位課題については直後課題の終了後に）、あとで再生が求められると、完全正答を100パーセントとした場合に、およそ何パーセントくらいの成績をあげることができるのかの予測が求められた。

(9)評定反応の得点化と分析方法
①記憶実験については、従来の分析方法に合わせて、自由再生課題における直後再生テスト及び最終再生テストの成績を算出した。さらに、最終再生成績の予測についても同様の集計・整理を行った。下位リハーサル方略質問紙については、「まったくしなかった」から「つねにしていた」までの5段階の評定反応に対して、順に0～4の得点が与えられた。
②質問紙調査で得られた回答に対して以下の得点化が行われた。EMQ については、「最近6ヶ月で1回もない」から「日に1回以上」までの9段階で評定反応に対して、順に1～9の得点が与えられた。CFQ については、「まったくない」から「非常によくある」までの5段階の評定反応に対して、順に0～4の得点が与えられた。MIA については、「まったくそのとおりだと思う」から「まったくそうは思わない」までの5段階の評定反応、または「まったくしない」から「いつもする」までの5段階の評点反応に対して、順に1～5の得点が与えられた。
③WMS-R では、専用の記録用紙に13の下位検査ごとの反応を記録し、検査マニュアルに従って粗点が算出された。下位検査ごとの粗点は所定の重みづけがなされ、それらの重みづけられた粗点をいくつか組み合わせて合成得点を算出した。その合成得点から、年齢群別の指標得点への換算表に基づいて、一般的記憶、言語性記憶、視覚性記憶、注意／集中力、遅延再生という五つの指標得点が算出された。
④RBMT については、専用の記録用紙に「9. 見当識」を除く八つの下位検査ごとの反応を記録し、検査マニュアルに従って素点が算出された。それらの素点から、①満点ならば1点、それ以外は0点という基準で換算されるスクリーニング点、②それぞれの下位検査ごとの基準にしたがって0，1，2点の3段階に換算される標準プロフィール点、の2種類の得点指標が算出された。

(10)倫理的配慮　研究代表者の所属する神戸学院大学の「ヒトを対象とする研究等倫理委員会」の事前審査を申請し、2013年7月に承認を受けた。すべての参加協力者に対して、実験・調査・検査の参加に関するさまざまな権利を保障する文書を示し、そうした理解のうえで本研究への参加協力に同意する文書を研究者との間で取り交わした。

４．研究成果

本研究の主要な結果は、次のとおりである。
①自由再生課題において実験参加者に直後再生の後に最終再生での再生項目数の予測を求めたところ、最終再生予測は再生試行の経過に従って過大予測から過小予測へと変化していった。
②自由再生課題終了後に実験参加者に下位リハーサル方略の使用頻度に関する質問紙への評定を求め、その評定結果と直後再生成績、最終再生成績及び最終再生予測との関係を重回帰分析により検討した。その結果、直後再生成績には、単一反復とカテゴリー化という下位リハーサル方略の使用が影響していた。最終再生成績の場合、多重反復とカテゴリー化の使用頻度の影響が見られた。しかしながら、最終再生予測は下位リハーサル方略の使用頻度の多少によって説明することはできなかった。
③すべての実験参加者に対してメタ記憶質問紙として、EMQ、CFQ、MIA、の3種類の質問紙への回答を求めた。先行研究による因子分析結果をもとに、各質問紙の因子ごとの実験参加者の平均評定値を算出し、それぞれについて度数分布を描いたところ、ほとんどの質問項目群において正規分布に近いパターンが得られた。しかしながら、EMQ の第3因子「課題モニタリング」と第5因子「空間記憶」については、いずれも度数分布は正の方向に歪んでいた。
④すべての実験参加者に WMS-R を実施し、そのなかで遅延再生を含む下位検査について直後再生の後に遅延再生を予測するよう求めた。その結果、記憶検査における遅延再生の予測は、いずれも過小予測であることが示された。
⑤すべての実験参加者に RBMT を実施し、そのなかで下位検査ごとに課題教示のあと（または直後課題のあと）に課題成績を予測するよう求めた。その結果、記憶検査における遅延再生の予測は、「物語」以外は、いずれも過小予測であることが示された。
⑥自由再生課題における「最終再生成績－最終再生予測」を、メタ記憶質問紙の因子ごと

の平均評定値との関連性を調べると、いずれも相関関係は認められなかった。しかしながら、「最終再生成績－最終再生予測」は、WMS-R の五つの指標得点のうち、「一般的記憶」、「言語性記憶」、「視覚性記憶」、「遅延再生」の四つの下位検査において正の相関が見られた。その場合、総じて、自由再生課題での最終再生の予測が成績よりも少ないほど、WMS-R のこれらの指標得点が高くなっていることが見出された。RBMT では、下位検査「姓名」と「道順（直後）」において正の相関が見られた。WMS-R と同様に、自由再生課題での最終再生の予測が成績よりも少ないほど、RBMT のこれらの指標得点が高くなっていることが示された。

⑦自由再生課題における「最終再生成績－最終再生予測」の値をもとに、試みに、全実験参加者を記憶実験における過大予測群、適正予測群、過小予測群の３群に振り分けて、各群の記憶検査の結果を比較すると、ほとんどの指標得点において、過大予測群のほうが過小予測群よりも検査課題成績が低いことが明らかになった。

⑧この過大予測群、適正予測群、過小予測群の３群についてそれぞれ、記憶検査での「遅延再生成績－遅延再生予測」の平均を調べてみると、WMS-R でのみ、過大予測群＜適正予測群＜過小予測群の順に、ほとんどの下位検査で「遅延再生成績－遅延再生予測」の値が高くなることが示された。

これらの研究成果を通して、少なくとも本研究で取りあげた実験室場面、検査場面、日常記憶場面という記憶場面状況において一般成人の記憶コントロールと記憶モニタリングに反映されるメタ記憶にはいくつかの特徴的な乖離が認められることが明らかになった。実験室場面において課題成績を正確に予測する者が必ずしも日常生活場面での記憶行動を効果的に遂行しているとは限らなかった。むしろ、記憶課題の成績を過小に予測する者は、概ね記憶検査の結果が良好で、記憶能力が高く判定される傾向にあった。従来のメタ記憶の機能的役割について再検討すべきであると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１３件）

① 清水寛之・湯浅万紀子、記憶特性質問紙（MCQ）による科学館体験の自伝的記憶に関する検討－科学館職員，大学生，および高齢者における小学生の頃の科学館への好意度の分析－、人文学部紀要（神戸学院大学人文学部）、査読無、第 36 号、2016、pp.167-182.

② Anderson, D., Shimizu, H., & Campbell, C. Insights on how museum objects mediate recall of nostalgic life episodes at a Shōwa era museum in Japan. *Curator: The Museum Journal*, 査読有、Vol.59, No.1, 2016, pp.5-26.

③ 清水寛之・金城 光、日常記憶の自己評価に関する成人期の加齢変化:日常記憶質問紙（EMQ）への評定反応の分析から、人間文化（神戸学院大学人文学会）、査読有、第 38 号、2015、pp.59-69.

④ 清水寛之・金城 光、成人期における日常記憶の自己評価に関する発達的変化－日常記憶質問紙（EMQ）による検討－、認知心理学研究、査読有、第 13 巻、第 1 号、2015、pp.13-21.

⑤ 清水寛之、高齢者のメタ記憶、老年精神医学雑誌、査読無、第 26 巻、第 8 号、2015、pp.919-926.

⑥ 清水寛之・高橋雅延・齊藤 智、メタ記憶質問紙を用いた日常記憶の自己評価に関する加齢変化の検討－高齢者における日常記憶質問紙、認知的失敗質問紙、及び記憶能力質問紙の標準データ－、人文学部紀要（神戸学院大学人文学部）、査読無、第 35 号、2015、pp.185-204.

⑦ Anderson, D., Shimizu, H. Personal implications of specific long-term memories on social events: Retrospective and current memory of older Japanese adults' experiences of visiting world expositions. 基礎心理学研究、査読有、第 33 巻、第 2 号、2015、pp.167-175.

⑧ 秋山 学・清水寛之、購買満足と自伝的記憶との関連－若齢者と高齢者への質問紙調査による検討－、人間文化（神戸学院大学人文学会），査読有、第 36 号、2014、pp.37-46.

⑨ 清水寛之・高橋雅延・齊藤 智、高齢者における日常記憶の自己評価:メタ記憶質問紙による検討、認知心理学研究，査読有、第 12 巻、第 1 号、2014、pp.1-13.

⑩ 清水寛之・湯浅万紀子・Anderson, D.、社会文化歴史系博物館における来館者の長期記憶と懐かしさ反応に関する調査研究の意義、日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要、査読有、第 18 号、2014、pp.19-25.

⑪ 清水寛之、自由再生成績に及ぼすリハーサル方略の使用頻度の効果－重回帰分析による検討－、人文学部紀要（神戸学院大学人文学部）、査読無、第 34 号、2014、pp.67-79.

⑫ Kinjo, H. & Shimizu, H. How Japanese adults perceive memory change with age: Middle-aged adults with memory performance as high as young adults evaluate their memory abilities as low as older adults, *International Journal of Aging and Human Development*, 査読有、Vol.78, No.1, 2014, pp.67-84.

⑬ 石野陽子・清水寛之、個人の目標信託に及ぼす時間的展望と自伝的記憶の影響、島根大学教育学部紀要，査読無、第 47 巻，

2013、pp.71-80.

〔学会発表〕(計１５件)

① Shimizu, H. An evaluation of accuracy of memory monitoring and effectiveness of memory control in laboratory and everyday settings. *The 31th International congress of Psychology*, July 24-29, 2016, Yokohama, Japan.
② 清水寛之、メタ記憶の観点に基づく記憶モニタリングの正確性と記憶コントロールの効果性の評価Ⅲ－ウエクスラー記憶検査における成績予測とメタ記憶質問紙による日常記憶の自己評価との関連－、日本心理学会第 79 回大会、2015 年 9 月 22 日、名古屋国際会議場（名古屋）
③ 清水寛之・金城 光、日常記憶の自己評価に関する成人発達－日常記憶質問紙(EMQ)への評定反応の分析－、日本教育心理学会第 57 回総会、2015 年 8 月 28 日、朱鷺メッセ（新潟）
④ 清水寛之、日常生活における「喉まで出かかっているのに出てこない(tip of the tongue, TOT)」現象に関する調査研究Ⅳ－若齢者と高齢者における TOT 質問紙項目の項目間相関の差異－、日本発達心理学会第 26 回大会、2015 年 3 月 21 日、東京大学（東京）
⑤ 松田崇志・清水寛之、単語の虚記憶における言語情報と位置情報の保持(3)－日常記憶との関連－、日本心理学会第 78 回大会、2014 年 9 月 12 日、同志社大学(京都)
⑥ 清水寛之、メタ記憶の観点に基づく記憶モニタリングの正確性と記憶コントロールの効果性の評価Ⅱ－自由再生課題における成績予測とウエクスラー記憶検査における成績予測との関連－、日本心理学会第 78 回大会、2014 年 9 月 11 日、同志社大学(京都)
⑦ Anderson, D., Shimizu, H., & Yuasa, M. Understanding Visitors' Nostalgic Responses and Long-term Memories in Museums. *The 2014 Visitor Studies Association (VSA) Conference*, July 18, 2014, Albuquerque (U.S.A.)
⑧ 長谷川千洋・清水寛之、有名人に関する TOT 現象と TOT 解消方略－人名を求める質問紙調査の分析から－、日本認知心理学会第 12 回大会、2014 年 6 月 29 日、仙台国際センター(仙台)
⑨ 清水寛之・金城 光、成人期における日常記憶の自己評価に関する発達的変化－日常記憶質問紙（EMQ）による検討－、日本認知心理学会第 12 回大会、2014 年 6 月 28 日、仙台国際センター(仙台)
⑩ 石野陽子・清水寛之、個人的目標の他者への信託に関する調査研究（6）－目標信託の有無と託す者の選択との関連－、日本発達心理学会第 25 回大会、2014 年 3 月 22 日、京都大学(京都)
⑪ 清水寛之、日常生活における「喉まで出かかっているのに出てこない(tip of the tongue, TOT)」現象に関する調査研究Ⅲ－最近に発生した TOT 現象の特徴と状況－、日本発達心理学会第 25 回大会、2014 年 3 月 21 日、京都大学(京都)
⑫ 清水寛之、メタ記憶の観点に基づく記憶モニタリングの正確性と記憶コントロールの効果性の評価Ⅰ、日本心理学会第 77 回大会、2013 年 9 月 21 日、北海道医療大学（札幌）
⑬ 石野陽子・清水寛之、個人的目標の他者への信託に関する調査研究（5）－自身の夢を託した経験の有無に関連して－、日本教育心理学会第 55 回総会、2013 年 8 月 19 日、法政大学（東京）
⑭ 清水寛之・松田崇志、単語の虚記憶における言語情報と位置情報の保持(2)－再認による検討－、日本認知心理学会第 11 回大会、2013 年 6 月 29 日、つくば国際会議場（筑波）
⑮ 松田崇志・清水寛之、単語の虚記憶における言語情報と位置情報の保持(1)－再生による検討－、2013 年 6 月 29 日、つくば国際会議場（筑波）

〔図書〕(計１件)

① 日本認知心理学会（編）、有斐閣、認知心理学ハンドブック、2013、425.（清水寛之（分担執筆）、4-16 メタ記憶、pp.154-155）

〔その他〕(計１件)

① 清水寛之、日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書（基盤研究（C））平成 25～27 年度 課題番号 25380992)、記憶場面状況に応じたメタ記憶の機能に関する実験的検討、2016、160.

６．研究組織

(1)研究代表者

清水　寛之（SHIMIZU, Hiroyuki）
神戸学院大学・人文学部・教授
研究者番号：３０２０２１１２

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし